

緑爽会 9月山行・奥多摩滝めぐり

残暑きびしい9月、せめて滝めぐりで涼感を味わいましょう！

【期日】9月17日(土)【集合】JR武蔵五日市駅9:15
バス 9:27発(藤倉行)千足下車 歩行時間:約5時間
地図:当日配布(あきる野・檜原村) 係:川口章子 鳥橋祥子
申込:電話・FAXで047-463-8721 川口まで。

●10月15日(土)~16日(日) 宿泊研修 ロッジ山旅
ゲストとして『北八つ彷徨』の山口耀久氏を予定

●11月19日(土) JAC集会室にて午後1時30分~
石原國利・近藤信行両氏による「井上靖『氷壁』とその時代」



緑爽会報 NO. 100

‘11年7・8合併号
発行

(社)日本山岳会緑爽会

TEL 03-3261-4433

事務局

松本恒廣 樋口公臣

夏原寿一

近藤 緑 川口章子

横山 隆 渡部温子

【講演】

ヒマラヤを越えるツルの話

松田雄一

東尾根で、ヒマラヤを越えて南へ渡る大きな白い鳥を目撃して「モンズンは白鳥の飛来によって明ける」という感動的なレポートを書きました。

それにヒントを得た私は、北から南のインドに渡るのなら、必ず鳥は生息地へ戻るだろう。その戻るコースを利用してプレモンズンの安定した天候を予測できないかと思って調べはじめたのです。

一九五八年一月の会報『山』に「ヒマラヤを越える白鳥」が載って、それ以後いろいろな経過がありました。その大きなトビックを拾いながらお話ししたいと思います。

なぜ鳥が行ったり来たりするのか、なぜあんな高いところを越えるのか。渡り鳥に限らず、熱帯と北極、地球の南と北を移動する生物が多いことが、次第に分かってきました。小さなものではアサギマダラのような蝶でさえ、北海道から琉球列島、台湾へと移動しているのです。魚類もそうです。

私は登山のために、好天の予測をしたいという動機で始めたのですが、調べていくうちに、白鳥が飛ぶわけがない。これはツルの種類ではないかということがわかってきました。そして私が調べたものを、日本ネパール協会の会報に発表しました。「ヒマラヤを越える渡り鳥」という題で、まだツルとは断定しないで書いたのです。

その後、一九七〇年秋、大阪大学のP.モロ登山隊に参加していた住吉ドクターによって初めて、この渡り鳥の撮影に成功しました。その写真がもたらされると、やはり鳥の分野の人々が一番関心をもちまして、鳥学会から証拠写真を見せてほしいと言ってきました。

そこで私が招かれて日本鳥学会の例会に出席したのです。一九七六年三月のことでした。私は「私は専門家ではないからトリのことは



—松田さん

わかりません。私の関心は、なぜヒマラヤの上を行ったり来たりするのかにあります。それを登山の安全性のために役立てたいのです」とことわった上で、スライドを使って紹介すると、会場は騒然となりましたね。

「このトリがツルであることは間違いない。ソデグロツルなのか、アネハヅルなのか、それともクロツルなのか、アジアのヒマラヤを越えるのはその三種のツルだ」と、議論白熱。先生方から「君の発表は、一つの学界の範囲を越えた研究で大変興味深かった。頑張ってほしい」と、過分な評価をいただいていたのであります。

同年秋の日本・イラン合同マナスル登山隊が、ツルの渡りを見て好天をつかみ、登頂に成功しました。田村宣紀隊長の撮影したカラー写真が『科学朝日』誌上に掲載されると、これを契機にして多くの登山隊からツルを目撃したという情報もたらされました。中でも、一九七九年秋には、カモシカ同人数隊がダウラギリ山群で目撃、一九八一年にはイエティ同人数隊の加藤保男氏がマナスルで8ミリフィルムに収録、マナスルやカリガンダキ渓谷では毎年ほぼ同ルートを通過することがわかってきました。

さらに一九八九年には、マナスルにツル撮影隊が出かけてビデオ撮影に成功。ドキュメント番組で放映されましたが、ツルが上昇気流に乗って上空に昇るシーンなど、映像ならではの迫力がありました。

そして一九九二年秋にはNHK「世界いきもの紀行」の取材班が、カリガンダキで素晴らしい映像を収録して帰り、翌年の正月番組として放映しました。

ロマンから科学へ

さて、今日は暑気払いですから、ここでヒマラヤの涼しい映像を見ませんか。NHKの正月番組「アネハヅル ヒマラヤ越えの謎に迫る」です。羽田さん、どうぞお願いします。

(約一五分、ビデオ鑑賞。取材班の撮影した映像に加えて、今井通子さん、加藤保男氏ら登山家たちが登場。彼らが現地で見つけたツルの記録が、ヒマラヤを越える渡りの謎を解ききつかけになったことを語る)

これで皆さんも、だいたいの経緯がおわかりになったと思います。実際に登っているときの映像と、ツルに発信器をつけてコースを科学的に調査するようになるまでとは、かなりの時差があります。

一九九〇年頃から日本野鳥の会研究センターの樋口研究所長らは、鳥の体に付けた発信機による追跡調査を始めていました。その小型送信機を開発したのは、日本の東洋通信機という会社です。それを付けた鳥の位置、高度、緯度、経度が気象衛星「ノア」を経由して即座にわかるというもので、それを使ってコハクチョウが北海道から樺太に渡るとか、シベリアに渡るとかの実験に成功、ほぼ実用化のメドができていました。

さらにその衛星追跡用小型送信機をツル

に装着させ、人工衛星を利用してツル類の渡りの追跡を始め、日本に飛来するナベヅル、マナヅルの渡りを点から線でとらえることも成功しました。

一九九三年六月、東京と札幌で開催されたナムサール条約締結国による国際会議のシンポジウム「ツルと湿地の未来」で、その実験の成果が発表されると、日本が開発したこのシステムは高い評価を受けました。

この発信機によってツルのコースが瞬間的にわかるようになりました。ツルの位置がわかるだけでなく、上昇気流など気象の研究も進みました。科学的に解明されてしまうと、私が最初に感動した夢やロマンが、だんだん少なくなっていくのを感じます(笑い)が、それも仕方がないですね。

ポストモンスーンにインドまで渡ったツルが、プレモンスーンには一つも見られなかったのは何故か。繁殖地で子どもを育てるためには、プレモンスーンでは間に合わない。北帰行のときには、インドからカスピ海を迂回して行くのです。そのため三月上旬には、カスピ海のほうへ旅立って行く。それからモンゴルやシベリアへと渡って行きます。

念願のツルを見にヒマラヤへ

長いことツルのヒマラヤ越えに関心を持っていながら、他の人の経験や記録に頼るばかりで、私自身が実際にこの目で確かめたのは、ずっと後になってからでした。

日本山岳会副会長(一九九一〜九三)を退任、仕事からもリタイアした一九九三年九月から一〇月にかけて、ツルの渡りを見るためのヒマラヤ・トレッキングに出かけました。パーティーは私と家内の二名。それにシエルパーサー、コック、キッチンボーイ、ポー

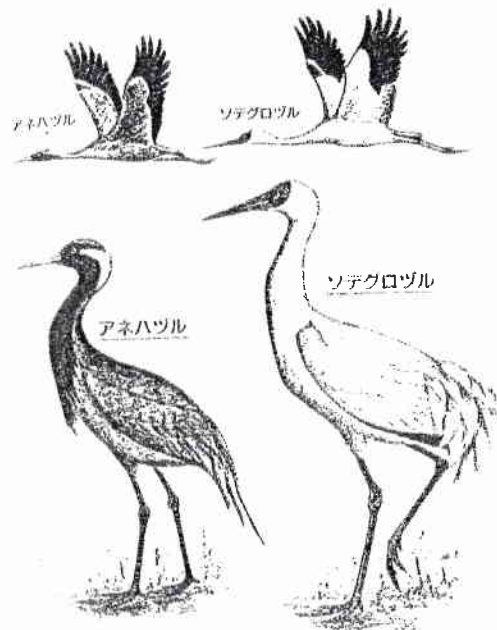
ター四名、合わせて九名の編成でした。

本当はマナスルに行きたかったのですが、マナスルはトレッキング・パーティットでは無理で、どうしても登山許可が要するというので、あきらめてカリガンダキにしました。ツルを観察するベースとしては、一九六九年にドイツの鳥類学者J・マルテンスの隊が観察ポイントとしたダバ・コルへの途中、ヤク・カルカの周辺と考え、カトマンズではトリブバン大学のビレンドラ・スウォール氏(オオツルの専門家)からも、観察場所についてのアドバイスを受けました。

また出発前に日本気象協会の奥山巖氏(JAC会員)に、その年のモンスーン明けの予想を聞いたところ、九月末の時点では、カラコルムからネパールにかけて大ヒマラヤ山脈の南側に雲の帯があるものの、上空五〇〇羽高層天気図では既に秋の気配であって、ツルは予想外に早く、一〇月上旬にはヒマラヤを越えるのではないかと言われました。そこで急いで日本を発ち、一〇月一日には、空路、ポカラからジョムソンに到着したのです。

ジョムソンにおられる近藤亨氏に聞くと、九月二六日にツルの渡りの第一陣が南に向かったけれど、本隊はまだだと聞いて安心しました。

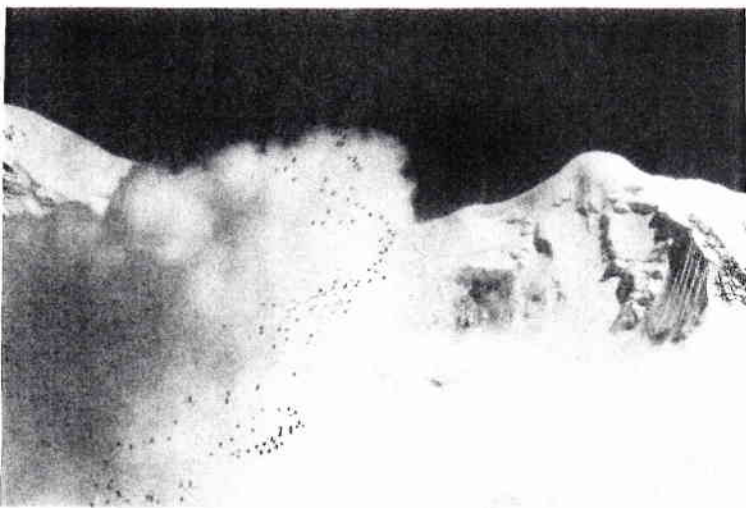
到着した日の午後、早くもツルの渡りの編隊を初めて垣間見ることができました。その日はマルファに泊り、翌日は二二〇〇mの高度を一気に上がって、三九〇〇mのアルバルにキャンプ、その次の日には四六〇〇mのヤク・カルカにツル観察のためのベースを設営しました。そして、十月三日には三〇一〇羽、四日には一六八〇羽、五日には七二九〇羽とかなりの数を数えることができました。カラ



ンクルン、カランクルンと鳴いて、仲間を呼び合いながらやってきて、この地点の上空までくると上昇気流をとらえ、編隊を解いて渦巻状に上昇し、再びV字型の編隊を組んで南に向かう光景は、神秘的というよりありませんでした。

ベースから見ますと、ニルギリ側、ダンパス側、頭上と、渡りのコースは必ずしも決まっていらないようで、午前一〇時頃になって南風が吹き、上昇気流による雲が始めると、ツルの渡りが始まるのでした。上昇気流を待つて飛んでくるためだろうと思われまます。

観察ベースのあるカルカは、ダウラギリ主峰のベースキャンプへの途中にあるので、高度順化に失敗した隊員が休養のために下りてくることもあって、登山隊の様子をきくこともできました。その年は、日本から横浜のベールニナ山岳隊と、長野県山岳協会隊の二隊が入っていて、一〇月上旬の天候が安定していたので、登頂はまず成功疑いなしと考えました。後で聞くと、私たちが最も多くツルを数えた日の翌日、一〇月六日にベールニナ山岳隊が登頂したそうです。ポストモンスーン



ヒマラヤを越えるツルの渡り (右の山はニルギリ) 撮影 松田雄一

のツルの渡りと登頂時期との関連は、この地域に関する限り、かなりの確率で活用できることが裏付けられて、大いに自信をもつことができました。

一〇月上旬の一週間に見たツルの数は、数えただけで一万四五〇〇羽、数え損なつたものを加えると、約二万羽のツルが渡つていったものと思われまふ。

渡りの観察を終えてから、カリガンダキ上流のカグベニ付近に足を延ばして、ソバ畑に降りているツルを見ようと思いましたが、この年は天気がよかつたためか、ソバ畑に降りているツルは一羽もいませんでした。

一〇月一〇日、パーティを解散、我々二人とシエルパのサーダー、ポーターの四人で、

マルシャンディをくだることにしました。一〇月中旬の黄葉のムクチナートやマナン、ピサンなど、マルシャンディの上部は素晴らしい景色で、トレッキングを十分に堪能することができました。またトンジエからの下流は、マナスルやヒマルチュリ登山当時に回想しながらの旅で、感慨深いものがありました。いずれにせよ、一〇月上旬にカリガンダキに入れば、ツルの渡りに会うことができることは間違いないと、確信できた旅でした。

北アルプスを越える渡り鳥

一九九三年にヒマラヤを越えるツルを見てきて、そのことを会報『山』(一九九四年二月号)に書きました。すると九四年のウエストン祭に記念講演を頼まれて、その話をさせていただきました。

その後で、植松晃岳さん(信濃支部・自然保護委員)から「日本にも北アルプスを越える渡り鳥がいますよ」と言われ、「見たかったら九月の第三日曜日に松本駅で待っています」ということでした。

その約束の日の朝、松本駅に行き、乗鞍高原の南にある白樺峠の定点観察ポイントに、案内してもらいました。ただし、ツルではなくワシタカ類の「サシバ」と、クロズズメバチの巣(クロズズメバチの子)を好んで食べる「ハチクマ」が、上昇気流を利用して「タカ柱」を作つて高度を上げ、頭上を途切れることなく群れを作つて川の流れるように越えて行く光景には感動のほかりませんでした。新潟県から信州に入ったタカは、長野市付近、飯綱山上空を通過して、松本方面に向かい、安曇野を横断して北アルプス側へ移り、岐阜県側に入り、その後、伊良湖畔には向かわずに、琵琶湖付近を通過して瀬戸内海を経てハチクマが越冬地のインドネシア・ジャワ

島と九州を、最短ルートではなく中国大陸と朝鮮半島を経由する複数のルートで渡つていくことが、信州大学教育学部の中村浩志教授(生態学)と「信州ワシタカ類渡り調査研究グループ」との共同研究で解明されました。

この渡り調査は、二〇〇三年秋、白樺峠で三羽のハチクマに小型の発信器を付け、人工衛星で渡りの経路を調査。翌年一二月には三羽が越冬地に着きました。この中のメスの成鳥の一羽が、越冬地を二月二日に出発。マレーシアを北上、中国大陸を通り、朝鮮半島を北から南に縦断、松川村の繁殖地に辿り着きました。越冬地からの戻り一、〇〇〇羽はワシタカ類では新記録です。

一方、伊良湖畔には、関東平野で繁殖したツルの群が、紀伊半島を越えて鳴門海峡へ渡り、瀬戸内海を経て豊後水道を南下、九州南端の佐多岬から琉球列島を南下して南支那海へ渡る群れのルート追跡は、かつて山梨航空大学の野口教授らのグループが、時速六〇キロのサシバの後を追つて、エンジン付きグライダーで伊良湖―佐多岬まで追跡したことがありましたが、人工衛星を使つての「サテライト・トラッキング」が普及した今日からみると隔世の感があります。

植松さんは日本野鳥の会に所属する「信州ワシタカ類調査研究グループ」を作つていて、ハチクマの渡りの全容解明など、立派な実績を残しています。私も何回か現場を見に行きましたが、植生を大事にするために、樹林帯の上に櫓を立てて望遠鏡やカメラを据えて観察していました。

鳥が上昇気流に乗つて飛ぶときにタカ柱が立つのです。ツルは比較的広いところから飛び立ちますが、ハチクマなどは、狭い範囲をぐるぐる回りながら飛び立って行く。それを

信州ではタカバシラと言っています。上昇気流に乗れば、スーッと持ち上げられて行く。これはハングライダーの人達も同じです。下降気流に入ると、逆に引き摺り下ろされます。ツルの渡りのときでも、上昇気流から下降気流に入ると、鳥が可哀そうなほど引き下ろされて、そこからまたやり直します。

人間にはわからなくても鳥は上昇気流の起こる場所を知つていて、コースが決まっているのです。鳥越峠とか、雁峠とか、鳥にちなんだ地名があるところはたいい鳥の通り道ですね。

今朝もNHKでハチクマの映像を流していました。ハチクマは里山の樹林に棲んで田圃の蛙などを餌にしていると、里山や谷間の田圃の保護の事を取り上げていました。

ツルに関するよもやまばなし 自然に興味をもちますと、いろいろなことを教えられます。私も鳥学会で、山階鳥類研究所の山階先生の知己を得まして、以来、いろいろな情報を寄せていただきました。

アメリカには、米國ツル財団所長のジョージ・アーチボルト博士、この方の夫人、恭子さんは日本人ですが面白い話を聞きました。ツルを人工飼育する場合、どうしたらツルが人間に馴染むかという試みで、ツルの頭とクチバシのある衣装をまといつて餌をやるのだそうです。ツルも生まれたときの親の姿を覚えていて、その人になつくといいいます。(注・この現象を「すりこみ」という) インドという国は、ツルにとつては安住の地なのです。オオツルのことを「幸運をもたらす鳥」と呼んで、ゼツタイにいじめたり、殺して食べたりはしません。ツルの食べ物がなくなると、自分が蓄えた穀物を撒いたりして保護しています。

ところがイスラム圏は大違い。せつかくヒズブークシユ山脈を越えてきたツルが、 پاکستانの国境を越えると、そこにはツルを食用にしている種族がいます。アゲハヅルはおとなしいから、すぐ捕まる。それを籠に入れて鳴かせると、仲間が助けに下りてくる。そこをロープの先に石を結んで投げると、羽にロープがからまって簡単に捕まってしまう。このことが、自然保護の観点から、国際会議で大問題になったことがあります。

日本も鳥類保護会議から「日本人は渡り鳥を食べているではないか」という意見が出されて、「保護しなければいけない」と山階先生が苦勞されていました。それほど残酷なことはしていませんが、カスミ網などが追及されました。

スミソニアン研究所総裁のプロフェッサー・リブレイが、山階先生とも交流があつて、「日本ではソデグロヅルがヒマラヤを越えると言っているが、それは本当か」と言われて確認のために日本に来られました。次にインドを訪ねて聞いたところ「その事実はない」と言われたそうです。以来、日本でもソデグロヅル説は消えました。ツルの権威である高野伸二先生によつて「雪原の上空をツルが飛ぶと、下からの雪の反射で白く見える。そのためアナハヅルをソデグロヅルと間違えたのではないか」と断定されたのです。

一九八五年、筑波で科学万博があつたときも、渡り鳥に関係ある映像展示館のブースが眼につきました。カナダ雁が、海岸線に沿つて南から北に渡る映像など、立体的でリアルな展示でした。種明かしをすると、モーターボートの上に鉄塔を立てて、そこにカメラを据えて、鳥の高さとスピードに合わせて撮影したものでした。

私も一九九九年にヒマラヤンクラブから、ツルの渡りについて論文を書くように言われました。「Cranes that Cross the Himalaya」という題で総集編のつもりで書いたのですが、残念なことに気象やルートがデータがカットされてしまいました。文句を言つたら「ヒマラヤン・ジャーナル」は登山の世界では知られていないが、学問の領域ではない」と言われました（笑）。そんなこともありました。

この辺で、何かご質問がありますか。

——ヒマラヤを越えるときに、ツルが鳴きま

すね。あれは一声だけでいいですか？

松田 いえ、鳴きっぱなしです。仲間が迷わないように誘導しているのです。上昇気流の渦の中に入って、はぐれることのないようにカランクルン、カランクルンとけたたましく鳴きながら飛んで行きます。

——それはリーダーが鳴くのですか？

松田 ほかのツルも交互に鳴き立てます。

——ヤツホーみたいなものですね（笑）。

——ロシアとモンゴルの渡りは、越冬地で合流するのですか？

松田 その辺のことは、発信機を付けていればだんだんに解明されてくると思います。鳥にはいくつかの群れがありますよね。だいたいの群れは同じコースを通ります。

興味を持つと、次から次へと対象とするものが出てきます。私はこれまでいろいろ楽しいことをやってきました。自然から学ぶことは沢山あります。山へ行かれる皆さんは、そのことを充分おわかりと思います。これから山に学び、山を楽しんでくださることを祈念して、私の話を終ります。

（記録・近藤 緑／写真・小泉 義彦）

「講師紹介」一九三〇年生れ。日大卒。会員番号四一一。JACマナスル・ヒマルチュリ・エベレスト登山隊に参加。元副会長。名誉会員。

「追悼」小原晴子さん



経歴 一九六二年入会。会員番号五四五八。常任評議員・婦人懇談会顧問・山研委員会委員（山研委員をされていた時は、松本までの回数券を購入して熱心に活動された）

小原さんと歩いた夏山から

山口 節子

夏は毎年、小原晴子さんのお伴で北アルプスを歩いた。私とはひと回りちがう小原さんが、いつも負けん気の強さで圧倒された。去る六月二日、全くお元気だった小原さんをお見舞いして二週間後、この計報に言葉

を失った。（七月六日、心筋梗塞のため緊急入院、手術の甲斐なく七日、麻酔のさめぬままに亡くなられた。享年八九歳）

雷に追われて黒部五郎の稜線を駆け下り、太郎平小屋をめざしていた。雨は止みまなく、どこまでも続く林の中の道を、へばったパーティが黙りこくって歩く。

突然、トツプの私にうしろから声がかかった。ふりむくと、真っ赤な雨具のフードの中から、「ドンと来い！」とごぶしを振り上げて叫ぶ小原さんがいた。

緊張の糸が切れて、全員大笑いとなり、元気をとりもどして太郎小屋に駆け込んだ。

大沢小屋を早朝出発。針の木峠を通過して針の木谷を下る。岡部浩子の捜索・追悼山

行で通いなれたコースだ。

左岸に船窪への分岐をすぎて、ひとやすみしていると、うすぐらい谷から押し出された大岩の上に山靴が片方乗っている。

二人で、「あんなところに靴があるよ」と言いつつ、平の渡しで佐伯さんの船に乗せてもらって平の小屋へ。佐伯さんの、何事もなかったような「そのそばに仏さんがいるよ」に仰天した。（元理事・評議員。緑爽会々友）

思い出

宮澤美緒子

小原さんは、五六年度登頂マナスル隊副隊長の夫君を支えられ、内助の功は大きかった。私は八八年度入会で、山岳会の往時を知る方々とは遅れていたけれど、婦人懇談会の先輩と共に付き合い合せていただき、昔話を聞き知識を得てきた。ハイキングや旅は大御所達と交流が深かった方々とご一緒し、貴重な手柄をたくさん教えていただいた。

小原さんと二人だけの旅行も三回あり、中でも一〇年前の羽黒山参拝は忘れられない。「特別天然記念物羽黒山参道並木」の石段二、四四六段を登り切り、羽黒町長の石段踏破認定書を貰った。休憩時も涼しい顔をされて、その健脚に驚いた。お仲間からは「ママ」と呼ばれて親しまれ、私も会員としての自覚を学んだと思っている。有難うございました。

最後にお会いしたのが六月二日、そして七夕の夜、亡き御夫君と再会されたのだろうかと、そのまま手を取って逝かれたのかと思うと誠に羨ましく、お人柄が偲ばれる。感謝。

「編集後記」★緑爽会報が一〇〇号を迎えた。縁起のいいツルの話でこの号を飾ることができた。★小原夫人の死により山岳会女性史の一幕が下りた気がする。★この夏、暫く那覇で過ごしたが、猛暑の本土より気温が低く海風が快かった。沖縄で避暑気分とは何かおかし。（近藤）